

● シリーズ 私の見た日本 Vol.206

## 障がい者に優しい日本の空間づくり

王 鶴潼 (オウ カクトウ)

1998年 中国北京市生まれ  
2022年 東洋言語学院卒業、  
現静岡文化芸術大学デザイン  
研究科デザイン専攻修士1  
年生

建築とは、人が活動する場所をつくることである。だからこそ、常に人の行動を観察し、人の希望を聞くことが大切である。それはユニバーサルデザインの本質、できるだけ多くの人が利用できるということとつながりがあると私は思う。

日本に来る前、私は日本の建築領域に興味を持ち、大学院への進学を目指していた。日本に着いてから街を歩き、最初に目に入ったのは高層ビルだった。時間と共に大都市の生活に慣れるにつれ、最初は気がつかなかった路上の電柱、道ばたの植物、道路標識なども見えるようになった。その中でも特に、私の目に止まったのは点字ブロックだった。都市環境の美化のため、日本の道路は常に清潔感が保たれており、ゆえに点字ブロックが非常に目立っていたのである。さらに、それは横断歩道などの公共の場にも設置され、障がいがある方にとってすごく優しい環境だと思った。

母の友人は数十年前から日本で生活していた。その人には視覚障がいがあり、いつも日本の生活の便利さを語っていた。日本の住環境に対する、障がいのある外国人からの評価

が高い理由は納得がいく。点字ブロックに沿って、横断歩道にある音響式信号機の音を聞いて歩くことを想像するとかなり大変なように思われるが、目の不自由の方にとってはそれが日常で、目が見えないからこそ、耳、手、足、記憶力などのほかの感覚は人より何倍も使っている。空間の変化や小さな仕組みは、彼らに大きな影響を与えているのである。

空間から人への影響について、私が一番印象に残っているのは静岡市の葵小学校である。葵小学校は特別支援学級が開設され、自閉症・情緒障がいや知的障がいのある学生がクラスを分けて授業を受ける。特に自閉症・情緒不安定の学生にとって良い学習生活空間をつくるためには、様々な工夫をしなければならない。自閉症・情緒不安定のある学生は、落ち着かない、イライラするということがよくあるため、クールダウン(自分の情緒を整理する)の時間が求められた。よって、葵小学校は校内のいくつかの場所をクールダウンの場として用意した。教室の奥、窓側にある目立たないスペースに1つの隠れ場所をつくる。クールダウンをする時に、必要があればドアを閉めることで、より小さな空間が

できあがる。2枚の板だけで簡単にでき、さらに実用性と安全性の両方をあわせ持つ、優れた空間づくりだと私は思った。また、クールダウンの時間が欲しい学生用に用意した教室である。部屋自体はそれほど大きくない、2~3人用の小さな部屋で、かなりリラックスができる空間だと思った。入り口付近には、人の視線を遮断できるほどの高さのカーテンが設置され、学生の個別空間をつくり出している。そのほかにも、トイレの入り口にベンチが設置され、普段学生がおしゃべりをする場所になったり、必要な時にはクールダウンの空間として使われたりしている。

葵小学校などの学校教育施設以外にも、情緒障がいがある子どものための社会福祉施設が日本各地に開設されている。「まごころ学園」はコミュニケーションや対人関係などに困難を持つ子どもを対象とした福祉施設である。施設内には居室や食堂、訓練作業室、プレイホールなどいろいろなエリアがあり、空間の豊かさを感じられる。まごころ学園の最大の特徴は、斜めに並列した居室棟である。障がいがある子どもそれぞれの居場所を強調するため、各部屋の外壁はそれぞれ異なっ

た色が使われている。ギザギザとした特殊な配置で、廊下の端からでも、色とりどりの壁がはっきりと見える。また、私がもう1つ気になった空間は食堂である。子どもに生活感を感じてもらうため、半個室構造になっていて、まるで家のリビングにいるかのような雰囲気を生み出している。まさに「孤立しない主体的な空間」というものが感じられた。同じく、藤本壮介建築設計事務所がデザインした「情緒障害児短期治療施設 生活棟」も、情緒障がいのある子どもにとって優しい空間となっている。施設全体は白い建物で、情緒障がいのある子どもにとって落ち着きやすい空間である。「隠れられる場所」を1つのキーワードとして一つ一つの空間が建てられ、子どもたちが自身が建物を選んで逃げ込むことができる。廊下の片隅には小さなスペースが設置され、少人数で静かに会話ができるということからも、独立性とつながりの両方を感じられる空間になっている。

社会福祉の先進国として日本は、障がいのある人が他者と共生できる社会を目指し、様々な福祉施設や制度が整備された。特に子どもの場合には、教育を受ける場として特

別支援学校、地域の学校の通級学級、特別支援学級などの学校教育施設があった。確かに特化した教育システムや環境が用意されているが、それだけではなく、地域の子どもの交流も要素として盛り込まれていることがわかった。

障がいのある子どもにとって、障がいのない子どもや地域の障がいのある人・子どもとの触れ合い、交流、共同学習は非常に重要であるとされる。このような機会は、社会性を身につけ、人間性を養う機会となるため、それらを支援する環境が整備されることは大きな意義があると考えている。また、「視覚障害教育のあり方に関する実態調査報告書」<sup>1)</sup>においては、「地域にある学校の通常の学級との交流を求める声が多いものの、その機会が少ないこと」が指摘されている。

以上のことから、社会性と人間性を育むため、障がいのある子どもの交流のきっかけとなる「場所」を増やす必要があると考える。

そこで、私は自分の研究テーマを検討した。それは視覚障がい児童を対象として、視覚障がいの特徴に応じた学校の設備を確保すると共に、もう一つの交流空間として使われる学

びの場についての考察を通して、空間提案をおこなうことである。研究における、デザイン提案の対象児童について検討をおこなうべく、まずは視覚障がいの程度、およびそれらに応じた教育システム・施設の対応状況を整理する。そして、対応する施設のデザイン例について調査をおこない、提案のための基本条件を整理した上で、空間デザインの検討、検証をおこなっていくつもりである。

空間に対し、人それぞれが異なったイメージを持っていて、それは子どもも同様である。私が目指したのは華やかな空間をつくることではなく、修士課程2年間の中で私が見たこと、聞いたこと、学んだことを活かし、障がいのある子どもと障がいのない子ども、両者が共に楽しめる空間、一緒におしゃべりしたり、遊んだり、つながりを生み出す空間を私はつくりたい。

(翻訳:静岡文化芸術大学 国際文化学科2年 吉方 柚名)

## 引用文献

1) 社会福祉法人日本視覚障害者団体連合:「視覚障害教育のあり方に関する実態調査報告書」.pp.73, 2020

## 参考資料

i まごころ学園・まごころHP <https://www.magokoromitsuke.jp/> (2022.11.20最終閲覧)  
TD,障がい児入所施設「まごころ学園」にみる居場所のデザイン:前編/子どもたちを取り巻くデザインvol.3,2020 <https://www.td-media.net/report/design-around-kids-vol-3-1/> (2022.11.20最終閲覧)  
TD,障がい児入所施設「まごころ学園」にみる居場所のデザイン:後編/子どもたちを取り巻くデザインvol.3,2021 <https://www.td-media.net/report/design-around-kids-vol-3-2/> (2022.11.20最終閲覧)  
ii 新建築データ2006年9月号174P. 情緒障害児短期治療施設 生活棟 [https://data.shinkenkenchiku.online/articles/SK\\_2006\\_09\\_174-0](https://data.shinkenkenchiku.online/articles/SK_2006_09_174-0) (2022.11.22最終閲覧)  
Kenchiku HP,インタビューNo.007,「隠れられる場所」2007年度日本建築大賞受賞作品/情緒障害児短期治療施設 [https://kenchiku.co.jp/online/interview/interview\\_no007.html](https://kenchiku.co.jp/online/interview/interview_no007.html) (2022.11.22最終閲覧)



横断歩道にある点字ブロック



葵小学校 教室



葵小学校 2~3人用教室



葵小学校 トイレの入り口